

光る江戸期の職人の技

六月の終わりごろから秋葉神社の神門の建て方が始まりです。現在は武田棟梁が作業場にて傷んだ部材の補修を行っており、それと並行して取替えをする部材の加工を進めています。



手前側の傷んだ丸柱を、埋め木・剥ぎ木等で補修し再使用します。

また澤元彫刻では神門の彫刻の補修が行われているので見に行ってください。今、作業しているのは木鼻の虎の彫刻の補修です。木鼻には獅子や像鼻がよく見られますが、虎というのは珍しい

いのではないでしようか。補修作業は地道に虫に食われた穴に漆と胡粉を混ぜた物をいれ、割れの入った箇所を埋めるといふものですが、約二〇〇年前の立川流の彫刻を間近に見られることができました。この木鼻は建て方の最初に必要になるので急ピッチで進めています。



日本には生きてきた野生の虎は存在せず、江戸時代を通じてほとんどの人は実物の虎を見ることはできませんでした。中国や朝鮮から輸入した虎の絵を参考にしたり、虎によく似ていて身近な猫をモデルにしていたといわれています。立川和四郎棟梁は見たこともない虎を想像して下絵を描き上げたのだと思うと感慨深いです。

この寅の木鼻は彫りの深い立川流の特徴がよく表れていて、しっかりしぼった引き締まった顔、目力のある眼球、足の肉球の彫りの深さによる立体感などはさすが立川流彫刻とおもわせる風格があります。他の立川流の作品でも作例のない珍しい木鼻だと思います。当時は寅を実際に見ることができなかつたので、現代の我々が思う「虎」とは形が違って見えると思いますが、この寅の木鼻は江戸期の日本人の感性を感じることのできる貴重な作品ともいえると思います。彫刻師 澤元清延



下から見ると迫力があります。